2017年度 聖学院大学総合研究所 スピリチュアルケア研究会 主催

第２回スピリチュアルケア研究講演会

「自分らしさを求めるスピリチュアリティ　～乳がんの医療現場から～」報告

尹 玲花先生（上段中央）、田村綾子研究代表（上段右）
松本 周先生（上段左）

2018年１月23日に、ヴェリタリス館教授会室において、講師に尹玲花氏（mammaria tsukiji 院長）を招致し、聖学院大学総合研究所主催による2017年度第２回スピリチュアルケア研究講演会が開催された。司会には松本 周氏（日本キリスト教団中京教会牧師）があたった。降雪の影響もあったが26名の参会者とともに熱い場が形成された。今年度のスピリチュアルケア研究講演会は「生老病死に寄り添う魂のケア–“いま”を生きること、“これから”をみつめること–」をテーマとし、第２回である今回は、尹氏の医療実践に基づく、「自分らしさを求めるスピリチュアリティ–乳がんの医療現場から–」の講演がなされた。外科専門医・乳腺専門医である尹氏は、現在は乳がん専門クリニックを開設している。

講演では尹氏自身の阪神淡路大震災での母との死別から、いのちに向きあうしごとを選んだ思いが語られ、ことに、女性としての悩みやケアにかかわる思いから現在に至ることが紹介されたうえで、がんを経験すること、がんとであうこと、からみえてくるもの、を３つの受け止めとしてまとめられた。

それらは、尹氏によれば、･いのちとむきあう、･生き方を見つめなおす、･人とのつながりの確認、と説明できるものであり、自己の死生観の再吟味、自己の使命感の再認識、つながる人たちへの感謝、と言い換えうるものではあるが、たとえば、人とのつながりにおいて、その想起が苦しみをもたらす場合もあることの説明には、医療現場での経験に裏付けられた重みを感じることが出来た。さらに尹氏が、「わたしが出会った乳がんの女性たち」として事例を紹介するなかで上記のまとめを深めるとともに、尹氏自身が医療者としての接し方のみならず、ひとりの女性としてのよりそい、の視点からも感受した悩み、不安、尊重の思いを告げてくれたことは講演に大きな深まりと高まりを与えてくれるものであった。尹氏は最後に、「よりそうことの追求～どこまで、どれだけ～」が、医療との関わりの中での課題であると講演を締めくくった。

質疑応答では、患者家族への配慮、余命告知の是非、終末期をめぐるケア、などの問いに対し、愛するものを失う予期にある家族には、正しい情報提供が大切であり、その意味からも余命告知は基本的にはつたえる、と考えているが、個々のケースにおいてどのように伝えるかは検討が必要である、としたうえで、がんは死までの猶予がある病気であるから、それまでの生をどうつくり上げるかを考えるためにも、また、どのように死を受け止めるかにおいても、その人らしい生き方の支援をしつつ、その方の素晴らしさや、その方と周りの方とのかかわりを医療者として言葉により伝えていけるようにしたいと考えている、そのためには、その方が何を大切にして生きてこられたかを医療者として受け止めておくことが重要、としめくくったうえで、現代社会における「生きづらさ」を乗り越えるためにも、弱者への支援の声を上げ

ることの必要性を指摘して質疑応答をしめくくった。

（文責：小野久志［おの・ひさし］聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程）